

## 医療系教育に役立つラテン語の基礎知識について

菅原 美佳

### 1. はじめに

約2000年前に古代ローマで使われていたラテン語は、今では「古典語」となり、日常生活で話されることはほとんどなくなった。そのため、通例、日本の大学において、ラテン語の習得を目的とした授業が行われることは少ない。

しかしラテン語は、特に学術用語等においては現代でも当たり前のように用いられており、特に、医学・薬学英语の語彙の習得にはラテン語の知識が欠かせないと言って良い。

拙著（菅原（2017）、（2019））においては、医療英語の語形成について、それらがラテン語由来のものが多いことを考察したが、発音や文法や歴史などを含めた、ラテン語そのものの具体的な体系については触れていなかった。本稿は、ラテン語という言葉の姿を簡潔に紹介することで、大学の一般教養の教員として、医療の道を志す学生の教養にほんの少し豊かさを加える一助となれればと願い、ここにまとめることにした。

### 2. ラテン語の歴史

ラテン語は、印欧祖語（インド・ヨーロッパ語）を起源とし、そこから派生したイタリック語派に属する。もともとイタリア西部のラティウム地方（Latium）に住んでいたラティーニー族（Latini）の言葉であったことから、ラテン語（Latin）と呼ばれるようになった。<sup>1</sup>

---

<sup>1</sup> 田中編（2005）を参照。

ギリシャ語とともに、古代ギリシャ・ローマ文明を支える言語として大きな活躍をした後、ローマ帝国が滅びてからは、イタリア語やフランス語、スペイン語、ポルトガル語、ルーマニア語などのロマンス諸語に姿を変えたが、ローマ帝国時代の文化的影響力のあまりの大きさから、ラテン語はその後さまざまな分野において、さまざまな形で生き残っている。ゲルマン語派に属する英語等にも多大な影響を与えているだけでなく、キリスト教会や音楽、法律、医療、各専門分野の学術文献等において、重要な役割を果たしてきている。

### 3. 現代にも見られるラテン語の影響

現代において、我々が日常生活で何気なく使っている言葉の中にも、ラテン語の影響は数多く見られる。

例えば、「ウイルス」を表す英語の「virus」は、「毒、ウイルス、病原体」といった意味のラテン語「virus」が語源であるし、「ボーナス（英：bonus）」は、ラテン語の形容詞「bonus（「良い」）」に由来している。「ユビキタス社会」と言うときの「ubiquitous」は、ラテン語の「ubique（「どこでも」）」から来ている。

次に略称を見ると、「数」を表す略称としてよく使われる「No.」という表記は、綴りから言って、英語の「number」ではないことがわかるが、これは実はラテン語の「numero」（「数」を表す「numerus」の变化形）の語頭と語尾を使って略したものである。また、クラシック音楽の曲の作品番号の前に付されることが多い「Op.」も、ラテン語の「opus（英語：work）」から来ている。

また、特に自然科学分野においては、ラテン語の影響がさらに色濃く見られる。例えば、元素記号は、原則的にはラテン語を略したものである。例えば、元素記号「H」はラテン語のhydrogenium（水素）の略であるし、「C」

は carbonium (炭素)、「O」は oxygenium (酸素)、「Fe」は ferrum (鉄)、「Cu」は cuprum (銅) の略である。

解剖学用語も、「femur (大腿骨)」、「maxilla (上顎骨)」、「duodenum (十二指腸)」、「iris (虹彩)」、「uterus (子宮)」など、その多くがラテン語由来である。

また、各医療用語の多くが、「abdomin-」(腹部)や「ocul-」(目)のような、ラテン語やギリシャ語由来の接頭辞や接尾辞を使ってできている(詳しくは菅原(2017)を参照)。

#### 4. 文字、発音、アクセント

上述のように、日常生活や学問等において、ラテン語由来の語を目にすることは多いわけだが、その際、意味は分かっても、発音が分からなければもどかしい思いをするかもしれない。そこで、本節では、発音についての概要を述べていきたい。

まず、ラテン語の文字は、かつてローマ帝国で使われていた文字、すなわち、文字通り「ローマ字」と言われて現在も親しまれている文字(A~Z, a~z)である。

発音は、時代により変化は見られたが、少なくともローマ文化の最盛期の発音は、シンプルである。すなわち、一文字ごとに発音が決まっており、位置や綴りによって発音が変わることはない。英語において「know」の「k」を発音しない、というような、「無音」という概念もない。ローマ字表記の際の発音とほとんど同じと考えて良いのである。例えば、「habeō」(「持つ、保つ」という動詞)の発音は、便宜的にカタカナで表記すると、「ハベオー」であり、「māter」(「母」という名詞)の発音は「マーテル」である。このように、ラテン語は日本人にとって発音がしやすい印象がある。

ただし、注意を要する発音も少しある。例えば「C」は、英語のように「k」

と発音したり「s」と発音したりするということはなく、常に「k」（カ行の音）である。そのため、「Caesar」は、「シーザー」ではなく、「カエサル」と発音する。次に、「J」は「I」（「ヤ」行）の音であるため、「jam（今）」の発音は、「ジャム」ではなく「ヤム」である。また、「V」の発音は「w」（ウー）であるため、「vita（人生）」の発音は「ヴィタ」ではなく、「ウィタ」である（詳しくは岩崎（2004）、大西（2018）等を参照）。

アクセントの位置もシンプルである。1音節語はもちろん、その音節にアクセントがある。2音節語は、最初の音節にある。例えば上述の「māter」の例で言うと、アクセントの位置は「MA-ter」の大文字で示した部分である。3音節以上の語の場合は、語尾から二番目の音節が長い時はその音節にアクセントがあり<sup>2</sup>、短い場合は、語尾から3番目の音節にアクセントが付く。例えば「lībertās」（「自由」という名詞）は前者に相当するため、アクセントは「lī-BER-tās」である。

## 5. 格変化と語順

英語などは、語順が明確に決まっている一方で、ラテン語は、次の例文(1)に見られるように、主語＋間接目的語＋直接目的語＋動詞というような、おおよその語順の目安はあるものの、比較的、語順は自由である。

(1) Pater filio librum dat. (岩崎2004:14)

父は 息子に 本を 与える

なぜなら、ラテン語は名詞・代名詞・形容詞の格変化や動詞の活用などが非常に豊かな言語であることから、ある名詞が、文中において「主語」な

---

<sup>2</sup>長い音節とは、長母音や二重母音、子音で終わる音節のことである。

のか「目的語」なのかなどという情報を格変化によって表すことができ、必ずしも語順で表す必要がないためである。「格変化」とは例えば、次の例文(2)と(3)に見られるように、同じ「主人」という名詞でも、「主人が」という「主格」を表す時は「dominus」で、「主人を」という「対格」を表す時は「dominum」になるというような、名詞の語尾の変化のことである。

(2) dominus servum laudat. (小山2005:17)

主人が 奴隷を 褒める

(3) servus dominum laudat. (ibid.)

奴隷が 主人を 褒める

ラテン語はこの格変化のおかげで、(2)の「dominus」と「servum」の語順を逆にしたとしても、伝えたい意味を保つことができるのである。このような語順の自由さは、ある意味、日本語と共通するものがある。なお英語で言う「a」や「the」などの冠詞がラテン語にはないという点も、日本人にとっては取り組みやすいと言えるかもしれない。

ただし、本稿では詳細は割愛するが、ラテン語の格変化は上に挙げただけではなく、ほかにも4種類の格があり<sup>3</sup>、それぞれ語尾の形が異なる上に、女性名詞や男性名詞、中性名詞という名詞の種類によっても、形が異なるという複雑さがある。また形容詞も、それと同時に使われる名詞の性・数・格に応じて形を変えるし、動詞も、法、態<sup>4</sup>、時制、主語の人称や数によって活用の仕方が変わる（詳しくは岩崎（2004）、小山（2005）等を

---

<sup>3</sup> 属格（～の）、与格（～に）、奪格（～から）、および呼格（～よ）である。

<sup>4</sup> 「法」とは直説法や命令法、接続法などのことであり、「態」とは、能動態や受動態のことである。

参照)。

この辺りの非常に複雑な語形変化の体系こそ、ラテン語の習得を困難と思わせる要因になっているところと思われる。しかしながら、特に医療系の大学生が必要とするラテン語の知識の中には、文の中での語形変化の知識はほぼ含まれないため、さほど問題とはならないであろう。

## 6. 名詞の複数形

では、医療系の大学生が身につけておきたいのは、ラテン語の中の、特にどの部分の知識であろうか。一つは、3節で述べたラテン語由来の単語、および接頭辞や接尾辞等の知識(菅原(2017))であり、もう一つは、4節で示した、語の基本的な発音のパターンであろう。また、以下に紹介するような、名詞の単数形と複数形のパターン、といったものも挙げられると考える。

ラテン語について考える前に、まず英語において見ておくと、名詞を単数形から複数形に変える際、語尾に「-s」や「-es」等を付ける規則変化のほかに、man(単)/men(複)、tooth(単)/teeth(複)などのような不規則変化もあることは知られている。また、高校までの段階で、学習者は、外来語の場合は「datum」(データ、資料)の複数形が「data」になったり、「stimulus」(刺激)の複数形が「stimuli」になる、というような特殊ケースもあることを学ぶ。

だが、この語尾変化を、「特殊ケース」ではなく、ラテン語の「標準的な」語尾変化であると知れば、どうだろうか。特にラテン語由来の語が多く出てくる大学の医療系英語の学習においては、学習はよりスムーズになるであろう。つまり、本来は「不規則変化」として特別に覚えなくてはならないものが、「規則的な変化」として、簡単に理解・記憶できるものに変わる。以下にそれを具体的に示していく。

まず、上述の「datum」→「data」を例にとると、これは、ラテン語の名詞の標準的な語尾変化規則(4)に従っている：

(4) (単) -um → (複) -a / -ums

(4)の規則を知った学生は、「datum」→「data」だけでなく、「bacterium」(細菌)の複数形が「bacteria」になるということや、「symposium」(シンポジウム)の複数形が「symposia」や「symposiums」になることもスムーズに理解できるであろう。

また、(5)のような規則もある：

(5) (単) -us → (複) -i

(5)の知識は、上述の「stimulus」→「stimuli」だけでなく、「fungus」((真)菌類)の複数形が「fungi」となり、また、「esophagus」(食道)の複数形が「esophagi」となるというように、応用できる。

同様に、(6)のような規則についても考える：

(6) (単) -a → (複) -ae / -as

これに従えば、「mucosa」(粘膜)の複数形が「mucosae」であり、「gingiva」(歯肉)の複数形が「gingivae」であり、vertebra(脊椎)の複数形が「vertebrae」や「vertebras」であるということなどを、スムーズに理解し、記憶することができる。

(4)~(6)は、ラテン語の複雑な名詞の語形変化の規則の一部に過ぎないが、このような、医療系の単語によく見られる語形変化規則だけをピックアップして覚えることにより、学生の学習の効率が上がることが期待される。

## 7. おわりに

本稿では、特に医療英語の学習に役立つ点に絞って、ラテン語の壮大な世界のごく一部を簡単に覗いてきた。ラテン語は、格変化や動詞の活用などが複雑であるという点や、現代においてネイティブスピーカーに会い会話をすることがほぼ不可能であるという点などから、習得が困難な印象がある一方、発音が（特に日本人にとっては）シンプルで馴染みやすかったり、語順が自由だったり、意識してみると日常生活でもラテン語由来の単語があふれていたり、意外と取り組みやすい面もあると言えるだろう。

本学の小松島キャンパスにある教育研究棟の愛称「Veritas」<sup>5</sup>は、「真理、真実」という意味のラテン語であり、「われら真理の扉を開かむ」という本学の建学の精神を表している。今後も、微力ではあるが、学生達の科学の真理の探究に、一般教養教員の立場から彩りを添える手助けをし続けていけたらと思う。

## 参考文献

- ・岩崎務 (2004) 「CDエクスプレス ラテン語」白水社
- ・大西英文 (2018) 「はじめてのラテン語」, 講談社現代新書
- ・小林標 (2006) 「ラテン語の世界」中公新書
- ・小山次郎 (2005) 「ラテン語と英語」, 文芸社
- ・田中秀央編 (2005) 「増改訂版 羅和辞典」, 研究社

---

<sup>5</sup> ちなみに、4節で紹介した発音規則に従えば、発音は「ヴェリタス」ではなく「ウエリタス」である。



- ・日本解剖学会（2007）「解剖学用語」，医学書院
- ・ハン・ドンイル（2022）「教養としてのラテン語の授業」，ダイヤモンド社
- ・佐藤登志郎他編（2005）「医学英和大辞典第12版」，南山堂
- ・菅原美佳（2017）「医学英語の語彙力の強化を目指す効果的な教育方法についての考察」，東北医科薬科大学教養教育関係論集31号
- ・菅原美佳（2019）「形態素に重点を置いた医学・薬学英語教育の実践報告」，東北医科薬科大学教養教育関係論集33号

